

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】小笠原 弘幸

【所属】(助成決定時) 青山学院大学文学部史学科非常勤講師

【研究題目】

オスマン帝国末期からトルコ共和国初期にかけてのナショナル・ヒストリーの創造

【研究の目的】

本研究の目的は、オスマン帝国末期からトルコ共和国初期にかけて、トルコ・ナショナリズムの影響を受けた歴史叙述がどのように登場し、展開したのかを明らかにすることである。オスマン帝国は、その建国当初より多民族・多宗教国家として存在してきた。しかし 19 世紀に入るとヨーロッパで生まれたナショナリズムの影響を大きく受け、19 世紀後半から、トルコ民族国家として帝国をまとめていこうという思想が徐々に発展していく。この潮流は最終的に、トルコ・ナショナリズムを国是とするトルコ共和国の成立(1923 年)に結実する。この時期、歴史叙述の分野においても、ナショナリズムの影響が顕著に見られた。前近代のオスマン帝国の歴史叙述はイスラーム的世界観に基づいたものであったが、トルコ・ナショナリズムの影響下において、トルコ民族を中心とした歴史が著されるようになる。本研究では、こうしたナショナル・ヒストリーの登場と展開を、前近代の歴史叙述との関係に留意しつつ検討する。

【研究の内容・方法】

本研究の特徴的な方法として、対象範囲の史料を徹底的に調査・収集し分析対象とする点が挙げられる。歴史研究においてこれは当然の作法であると思われるかも知れないが、本稿の対象時期は出版点数が非常に多く、これらを網羅的に利用している先行研究は希なのが実情である。利用する史料としては、まず歴史書を中心とした叙述史料がある。前近代ではこの種の史料が主軸であるため、形式が類似した叙述史料を利用することで、前近代との連続性や非連続性が明瞭に現れやすいという利点がある。申請者は、トルコ共和国留学中および数度の短期滞在時に、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての叙述史料を相当数収集している。もちろん、近代以降のオスマン朝には、叙述史料のみならず、文書史料、そして新聞・雑誌なども膨大な点数が残されている。これらの史料も、近代史を検討するに当たって必要不可欠であり、随時収集・利用していきたい。

本研究の対象時期は、1876 年から 1930 年代までとする。はじめに 1876 年に設定する理由は、この年にスレイマン著『世界の歴史』というトルコ民族史を視野に入れた史書が著され、歴史叙述において新たなアイデンティティの模索が始まったからである。対象時期の下限は、トルコ共和国期の 1930 年代とする。トルコ共和国成立直後のこの時代、過度にナショナリスティックな観点を持った「公定史観」に基づく史書が著されている。これは、トルコにおけるナショナル・ヒストリーの究極の形であると位置づけうるため、本研究の下限とするに相応しいと考える。オスマン帝国期とトルコ共和国にまたがる形で研究を行う点に疑問を感じる向きもあるかも知れないが、オスマン帝国の青年トルコ党時代からトルコ共和国初期にかけての連続性は E・ツルヒャーや新井政美らによって指摘されており、最近の研究者によって共有されつつある認識である。

【結論・考察】

本研究の検討の結果、オスマン帝国末期とトルコ共和国初期におけるトルコ民族史の展開は、連続と断絶の二つの側面が存在することが明らかとなった。連続面としては、トルコ民族の偉大さを、イスラームの歴史の中に位置づけて主張する、あるいは(点数は少ないが)イスラーム化以前のトルコ民族の役割の強調が、オスマン帝国末期及びトルコ共和国初期の歴史叙述に共通している点が指摘できる。これに対して、トルコ共和国公定歴史学に見られるアナトリア・トルコ主義的な言説は、オスマン帝国においては、最末期にようやく見られる程度であることから、共和国期に入ってからの特徴であると位置づけることができよう。また、公定歴史学の特徴として先行研究で指摘される、古代トルコ人が世界中に伝播した等の言説については、その片鱗がすでにオスマン帝国末期に見られる。公定歴史学の特殊性は、完全に新しいものではなく、それまで存在していた言説を強調することで現前したと見なすべきであろう。